©早稲田予備校

早稲田大学 教育学部 英語 講評

出題形式	マーク式
試験時間	90分
特徴･その他	大問数は昨年度の４題から３題に減。一昨年までは５題構成だったので、そこから２題減少したことになる。昨年度は大問数が減少したが全体の分量はむしろ増加し、時間との闘いになったと思われるが、本年度はじっくりと取り組める分量になったと言える。ただし、Ⅱは３ページを超える非常に長い長文なので、来年度以降の対策として1,000～2,000語の“超”長文を取り入れた方がよさそうである。長文はどれも他学部と比較すると読み易いが、設問は昨年度より迷わせる選択肢が多く、やや難化したという印象を受ける。英文のテーマは、例年通り、自然科学系と人文科学系からバランスよく出題されている。設問は内容一致問題と文法問題がメインだが、どれも英文を単に語彙力で乗り切るだけでなくしっかり理解できているか、単語の使い分けや意味の違いを理解できているかを問うものが多い。このような英語問題への対処にはある程度のトレーニングが必要になるが、早稲田の他の学部に比べて教育学部の英語問題は難易度が相対的に易しく、７割前後の正答率が欲しいところである。

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
Ⅰ	読解問題	「歴史の再考」がテーマの読解問題。歴史を再考していく中で、「歴史上の人物の彫像などを取り壊すことも容認できる」という歴史家である筆者の主張を読み取ることができるかがポイントだった。英文自体はストレートな評論の形式で読みにくくはないが、彫像の破壊は反省すべき歴史の改ざんになるのでは、という一般常識にとらわれ過ぎると主旨がつかめず、正答を選べなくなる。設問では抽象度が高めの要約や言い換えから正解を選ばねばならないので、内容が理解できたからと言って正答しやすいとは限らない。設問の選択肢を選び取るとき、本文のどこに根拠があるか気をつけたい。文章読解よりも、選択肢の論理的な消去･選択が問われている問題といえる。	標準
Ⅱ	読解問題	昨年度のⅠで「ダーウィンの進化論の再考」がテーマの英文が使われたが、本年度はⅡで、ダーウィンの「人及び動物の表情」が取り上げられた。ダーウィン、アインシュタイン、フロイト…など入試頻出の人物についてはある程度の背景知識は身に着けておくと良いかもしれない。全体的に読み易いとはいえ、昨年度は見られなかった3ページ超えの非常に長い文章なので、正確に論の展開についていくには相当の集中力を要する。選択肢に関しては、かなり惑わせるものが多いので、選択肢は1語も見落とすことのない精読が求められる。特に内容との「不一致文」を選択する問題では、すべての選択肢を吟味し、比較検討した上で消去法によって正解を確定しないとミスが起こりやすい。空所補充問題は、文法･イディオムから選ぶものではなく、趣旨を正確につかめているかを問う問題となっている。４の「誰が“a scientific error”をしたか」という問いは､その後の大きな展開を予告する部分なので、全体を読んでから確定させるべき。他の問題に関しても、解きながら読み進めるのがこのタイプの読解問題の定石ではあるが、読み終えて全体を把握した後に、もう一度答えの見直しが必要だろう。かなり力のある受験者でも２～３問の取りこぼしは避けられないかもしれない。さらに、主旨を取り違えると不正解の連鎖が起こりそうな設問設定なので、この大問の出来が合否のカギになったかもしれない。	やや難

番号	出題内容	コメント	難易度
Ⅲ	読解問題	「マルチタスクの悪影響」がテーマの読解問題。頻出テーマでもあり、３つの文章の中では最も読みやすかっただろう。［１］の空所補充問題は、「滝」の意味の cascade が a cascade of…で「たくさんの…、次々と生じる…」の意味になることを知らないと選びにくい。５のタイトル選択の問題では、本文で明確に記憶や学習に対するマルチタスクの「悪影響」が述べられていたにも関わらず、「悪影響」の内容を直接反映した選択肢がなかったため戸惑ったかもしれない。ここはなんとか消去法で正答にたどり着きたい。	やや易